

# 問われる「現職VS新人」の構図でも 足並み揃わぬ核ゴミ反対派 『変える覚悟』



寿都町には核ゴミ最終処分地の選定に向けた「概要調査」の受け入れの是非を問う住民投票条例がある。「脱・肌感覚リコールの会」は最近、調査反対を呼びかけるポスター看板を国道沿いに立てた

任期満了にともなう寿都町長選(10月23日告示、同28日当開票)。3月の定例町議会で現職の片岡春雄氏(76歳)が7選を目指し出馬表明したのに続き、新人の町議・大串伸吾氏(41歳)が6月26日、北海道新聞の取材に対し出馬の意を表明した。他にも出馬を模索する町民もいる。反対派の住民団体メンバーでもある大串氏は、「自分が描く町づくりと概要調査の実施は相容れない」との主張を掲げ、7月中旬の正式発表を計画するなど「現職VS新人」の選挙戦の構図は固まってきた。しかし、肝心の同氏を支える町民の足並みは揃っておらず、「文献調査」をめぐる動きに翻弄された関係者には疲れも見える——そんな投票まで3ヵ月余りの状況をレポートする。(ル・ボライタ! 滝川 康治)

7期目の立起をめぐり、木村眞男議員が本人の見解を求めた。

片岡氏は23年余りにおよぶ自らの取り組みを振り返ったあと、「これまで培ってきた集大成として基幹産業の漁業、水産加工業の更な

7選をめざす現職の片岡氏に  
41歳の大串町議が出馬を表明

今年3月の寿都町議会一般質問。この11月で任期満了となる片岡春雄町長(1949年、旭川市生まれ)の

る発展のため生産力の向上はじめ住民生活に重要なインフラの更新や財政の健全化と、懸案の企業誘致に取り組んでまいりたい」「(今後は)将来にわたつて持続可能な町づくりに道筋をつけ、後進に道を譲る所存であり、引き続き全力を尽くす決意であります」(要旨)

そして、7選をめざし10月の町長選に出馬する意思を表明している。

「核のゴミ最終処分地の選定に向けた調査については、文献調査に応募し、早4年がすぎました。が、全国的な議論に広がっていないのが現状です。(今後は)国が責任を持つて調査地区を選定

6月26日、道新記者の取材に対して出馬表明を行なった大串伸吾町議



7選出馬を表明している現職の片岡春雄氏(21年の町長選で)

し、当該自治体に要請し、文献・概要調査に協力してもらう方向に舵を切る必要があると考え、国に要請活動を行なつてまいりたい」(要旨)と、政府の責任を強調する答弁を繰り返した。

「(今後は)将来にわたつて持続可能な町づくりに道筋をつけ、後進に道を譲る所存であり、引き続き全力を尽くす決意であります」(要旨)

として、7選をめざし10月の町長選に出馬する意思を表明している。

「核のゴミ最終処分地の選定に向けた調査については、文献調査に応募し、早4年がすぎました。が、全国的な議論に広がっていないのが現状です。(今後は)国が責任を持つて調査地区を選定

6月26日、道新記者の取材に対して出馬表明を行なった大串伸吾町議

6月26日、道新記者の取材に対して出馬表明を行なった大串伸吾町議

の担当課に片岡氏のインタビューを申し込んだが「取材には応じていません」との答えが返った。前回町長選の際には応じてくれたのだが、仕方がない。今後は推測も交え、遠慮なく書くことにする。

年度が変わり、6月26日に定例町議会が開催された。

終了後、町議の大串伸吾氏(1983年、新潟市生まれ)は、北海道新聞の記者に対し町長選に出馬する意向を表明。翌日の道新は「寿都町意向を表明。翌日の道新は「寿都町長選大串氏出馬へ核ごみ概要調査の是非争点「核ごみ反対派の支持焦点」の見出しで報じ、現職との一騎討ちの構図になってきた。

大串氏は、玉川大学農学部を卒業後、東京海洋大学と北大の大学院を修了。研究職をめざして漁業経済学の研究をしていた時の事例地のひとつが寿都町だったという。

町が主催する水産関係の協議会の講師を務める中で、片岡町長はじめ町や議会・漁協の幹部らと出会ったことをきっかけに2017年、寿都に移住し、3年間にわたり町の水産係に勤務。21年に町役場を辞めてか

らは、町内の漁業や水産加工の会社

で働いてきた(前職場の㈱カネキ南波商店は6月中旬に退社)。

片岡町長による文献調査への応募を機に5年前に発足した「子どもたちに核のゴミのない寿都を! 町民の会」の中心メンバーのひとり。「寿都町に骨を埋めるつもりで徹底的にやる、この町のために全力を尽くす」と心に決め、23年秋、39歳で町議選に立候補して初当選している。

地層処分がおかしいのではなく交付金欲しさの概要調査が問題

「出馬表明」の2日後(28日)、筆者は大串氏と会い、これまでの経緯や町選に臨む考えなどを訊いた。この日の同氏のフェイスブックには、新聞報道を補足する形で核ゴミ問題や町づくりに対する見解(反対限定)が記されている。原文のまま核ゴミ関連の部分を紹介しておく。

・日本で地層処分ができるかどうかは論争状態にあり、拙速に一部の地域が概要調査に進む流れはストップすべきだ。

・昨年、ドイツで地層処分が科学的に透明性・妥当性をもって進められているか監視する組織の共同代表で

あるミランダ・シュラーズさんが寿都町に来日し、ドイツの取り組みを講演した。地層処分がおかしいのではなく、日本における科学的、民主的な選定プロセス・最終処分法を改正する必要性を学んだ。

・全国的な議論になつてないのに寿都町が交付金欲しさで概要調査に進んだら、核のゴミの最終処分問題が寿都の財政問題にすり替わつてしまふし、国がこれを容認しているのはおかしい。これでは「過疎処分」だ。

※



有識者を招いて町が実施したシンポジウム。経費はNUMOが負担した(昨年11月)

筆者とは地層処分に対するスタンスの違いはあるが、おおむね共鳴であります。概要調査でさらに4年間も町民のわだかまりを抱えることは相容れない——と結んでいる。

### 片岡氏との面談きっかけに決断 分かりにくい住民投票のスタンス

大串氏が出馬を決意したのは今年初めのことらしい。昨年暮れ、定例町議会終了後の片岡氏との面談の席上、「年齢の問題で(7選出馬)を迷っているんだ。町の財政問題にも道筋をつけたいし……」などと、弱気なところを見せたという。

先述のドイツ人活動家の来町を機に、核ゴミ問題で町長と話ができる霧開氣が生まれ、町づくりについての考え方では一致していた。そこで町長選に向けて自身が声を上げよう、と考えるに至つたと明かす。

しかし、片岡町長は3月議会で冒頭の出馬表明を行ない、大串氏の目

きる見方だ。「過疎処分」とは、言い得て妙の表現でもある。

大串氏が強調する町づくりについては、道の駅を漁協直売所に移転することをはじめ、寿都町との関係人口の増加や移住者を増やす受け皿づくり、ウニの陸上畜養企業の誘致などを紹介し、これらの構想を推進するには、概要調査でさらに4年間も町民のわだかまりを抱えることは相容れない——と結んでいる。

算は狂う。そんな中、同月には前回町長選で片岡氏に惜敗した先輩議員の越前谷由樹氏に出馬の意思を伝え一方、家族の了解を取りつけるなど表明の時期を探っていた。

寿都町には、文献調査と概要調査の是非を問う住民投票条例があり、町長はその結果を尊重しなければならない(本誌1・4月号など参照)。

片岡町長は6月定例会の席上、「近い将来、国からの意見照会があれば、その中で対応する」と述べたが、その具体的な時期には言及していない。

住民投票は行なわず、調査に伴う交付金は受け取りたい——というのが本音のようにも見える。ちなみに現時点では経済産業省は、地元自治体に対する意見照会の時期について明らかにしていない。

住民投票について、大串氏はこう慎重な言い回しをする。

「概要調査に反対が多数ならば、これまで以上は(核ゴミ問題に)関わらず卒業するということ。賛成多数の場合、その結果は尊重しなければなりません。今、住民投票に進んだ場合は(核ゴミ交付金をめぐる)寿都の財政問題になつてしまふ。(投票時期は現職に委ねられているので)10月の町長

選にぶつける可能性もゼロではないでしょう」

この問題は町長選の大きな争点にも係わらず、本人のストレートな思ひは伝わつてこなかつた。有権者にとつても分かりにくいスタンスではないか。もどかしさが残つた。

### 支援態勢づくりは今後の作業に 反対派住民らの結束に課題が：

出馬表明によって一騎討ちの構図にはなつたが、支援態勢の構築はこれから作業になるようだ。

「正式な出馬会見は7月中旬にもやりたい。現時点では(町長候補予定者の)後援会の代表者は決まっていません。代表が決まらないならば、(選挙戦の対応は)自分でやろうと考えています」(大串氏)

都町には、最終処分地の選定に向けた事前調査に反対する団体として、以下の3つが存在する(註・会員数には重複加入者も含む)。

- ①子どもたちに核のゴミのない寿都を! 町民の会・20年設立。共同代表・三木信香さんら2人。町内会員数は約30人)
- ②脱・肌感覚リコールの会・20年



独自に町長選出馬を模索中の田原誠氏

設立。共同代表・槌谷和幸さんら3人。同約20人)

③核のゴミいらない寿都の会・23年設立。越前谷由樹代表。同約150人)

大串氏は「町民の会」の中心メンバーだが、同会は以前から選挙などの政治活動とは距離を置いてきた。今度の町長選でも、団体として大串後援会を支えることはしない方針という。そうしたやり方に對し、「核ゴミ問題などで独断的な片岡町政を、本気で変える気があるのか」と疑問視する町民の声も聞く。

大串氏は、前回町長選では「1135票VS900票」で現職に惜敗した越前谷氏のもとを訪ねる一方、5月中旬には「寿都の会」の役員会で自身の考え方などを説明した。これらを踏まえ、同会がどう対応するか、現時点ではまだ決まっていない。

今回の出馬表明については、「町づくりには若さが必要であり、前回の出馬表明については、



前回町長選で惜敗し、今は反対派団体の代表を務める越前谷由樹氏

歓迎したい。(移住者でもあるので)町を俯瞰して見えるのでは。今後が楽しみだ」(60代男性)

と評価する人がいる一方、「高学歴のせいもあるのか、上から目線」「独断専行のところがあり、首長として住民に寄り添えるのか」といった声もある。地元出身者でないこともあり、知名度も今ひとつ。本格的な選挙戦までには、克服すべき課題が山積しているようだ。

### 独自に出馬を検討中の町民も 候補の一本化は実現するか?

文献調査で搖れる故郷の危機を座視できないと4年前に十勝管内からUターンした寿都出身の田原誠さん(49年生まれ・21年10月号参照)は今、町長選出馬を検討している。

所属団体の方針がこうだから、一丸となって大串氏を支援する展開はないにくらい。「リコールの会」共同代表のひとりは、「結局、うちの会の中心メンバーが後援会の核になるのではないか」と話す。

大串氏は、前回町長選では「1135票VS900票」で現職に惜敗した越前谷氏のもとを訪ねる一方、5月中旬には「寿都の会」の役員会で自身の考え方などを説明した。これらを踏まえ、同会がどう対応するか、現時点ではまだ決まっていない。

今回の出馬表明については、「町づくりには若さが必要であり、前回の出馬表明については、

選にぶつける可能性もゼロではないでしょう」

この問題は町長選の大きな争点にも係わらず、本人のストレートな思ひは伝わつてこなかつた。有権者にとつても分かりにくいスタンスではないか。もどかしさが残つた。

町長を務めた実兄の会社を切り盛りし、原発や核ゴミ問題には関心が強かつた。帰郷後は家庭訪問を重ねて文献調査などの問題点を説明し、2年前の町議選に出馬して落選。片岡町長のやり方は地方自治や民主主義を蔑ろにしていると捉え、老人施設などの建設を優先する「箱もの町政」に異議を唱える。6月24日には期日前投票箱の厳重な管理を求め、町選管に公開質問状を提出している。

「地震大国の日本のどこにも地層処分の適地はない」が持論、泊原発の再稼働の是非には触れず概要調査の問題点を唱える大串氏には批判的だ。「町長は国に対し『概要調査には進まない』と表明すればよく、住民投票はしなくていいのではないか。町民の負担が重すぎる」と語り、対抗馬の一一本化については「その必要性は十分考えており、いろんな展開を想定している」と述べている。

大串・田原両氏の求めに応じ、会員数がもっとも多い「寿都の会」は、役員会でそれぞれの意向を聴いた段階という。越前谷代表は7月2日、「町長候補の一本化は必要だと考えているが、会として大串君を積極的に応

援する流れにはなっていない。今後総会を開いて詰めていきたい」と述べるとどおり、現時点では最終的な結論は出ていない。

町長選まで3カ月余り、核ゴミ反対派陣営の足並みが揃わない中、時間がだけが過ぎていく。前回選挙での些細なわだかまりが尾を引いている面もある。ある町民は「皆が評論家なんだよな」と嘆く。前回選挙から4年もの時間があつたのに、なんという体たらく——率直に言つて、そんな印象は否めない。

多選や強引な行政運営などに対する一部町民からの批判はあるが、現職優位の状況に変わりはない。核ゴミ問題のみならず、実際の選挙戦では住民同士のつながりや候補者の人柄・世代・知名度なども試される。10月28日の投開票まで目を離せない状況が続く——。(7月3日現在)